

第134回 三方限古典塾（'17, 12, 21）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その7）

1 人流の品格は、君子小人を以ってこれを定むれば、^{おおむね}大率、九等有り。君子の中の君子有り。才全く徳備わり、^{ゆく}往くとして^{よろ}宜しからざるなき者なり。君子有り。徳に^{ゆたか}優にして才に短なる者なり。善人有り。^{ぜんにん}恂雅温樸にして、^{ただ}僅かに自ら守るに足り、^{しえと}識見は正しと雖も自ら決する能わず。躬行は力むと雖も自ら保つ能わず。

衆人有り。才徳識見、俱に取るに足るなく、世と浮沈し、利に趨り、害を避け、碌碌たる風俗の中、自ら表異するなし。小人有り。偏気邪心、ただ己私をこれ殖し、苟も欲する処を得れば、また物を害せず。小人の中の小人有り。貪殘陰狠にして、意の極まる所を恣にし、而して才は以ってこれを済すに足り、怨を斂め、怙みて終え、顧忌する所なし。

外に小人に似たるの君子有り。高峻奇絶にして、俗檢に就かず。然れども規模宏遠にして、小疵常類は、以ってこれを病ますに足らず。君子に似たるの小人あり。老詐濃文にして、善く蔵め巧みに借り、天下の大悪を為し、天下の大名を占め、事幸にして敗れざれば、当時、後生皆欺く所となり、而して竟に知らざる者なり。

君子、小人の間なる者なる有り。行もまた正に近くして偏し、語もまた道に近くして雑り円通を学べば便ち俗に近く、古朴を尚べば則ち腐に入り、寛なれば便ち姑息、厳なれば便ち猛鷲なり。この人や、君子の心ありて、小人の過ちある者なり。毎に道を害うに至る。学者これを戒めよ。

（品 操）

（意訳） 人間の品格は、君子と小人の見地から観察して九つの等級に分けられる。

一 君子の中の君子 才（能力）と徳（人格）を円満に兼ね備わり、往くとして可ならざるものであり、どんな事態にもきちんと対処することができる。

二 君子 徳（人格）はすばらしいが、やや才とか智などの能力に欠けている。

三 善人 温かく素直な心を持ち、教養があつて垢抜けし、一所懸命に努力はしているが、それは辛うじて自ら守る程度のものであり、人を化する程の積極的な力はない。

四 衆人 能力・人格・識見の何れも際だったものはない。世と共に浮き沈みしながら、己の利に走って害を避け、小石のように平凡で役立たずだが、それに異を表することもできずに一生を終わってしまう。

五 小人。気性が偏り心がねじけていて、ひたすら自分の利益のみを追求する。しかし、理性はもっているもので、欲しいものが手に入れば、それ以上周囲に迷惑はかけない。

六 小人の中の小人 根性ががひねくれ、意のままに振る舞い、そうするだけの才はある。人に嫌われ恨まれても一向に顧みて気にすることもない。

七 小人に似た君子 高く構えて人を寄せ付けず、世間のしきたりには拘束されない。しかし、器量や人柄が大きいので小さい傷や通常の欠点などは問題にならない。

八 君子に似た小人 巧みな嘘をつきうわべを飾り、大きな悪事を重ねながらも名声を得る。しかも悪事が露見しないので、その時代の人も後生も欺かれて気づく者はいない。

九 君子と小人の間の人間 正直なようで偏り、まともなようで要領を得ず、円満なようで俗、枯れた味も役にたたず、寛大なようで姑息、厳格なようで猛々しく、君子を装い小人の過ちを犯し結局は理想から離れていく。くれぐれも用心しないとイケない。

（余説） 安岡正篤は、一のタイプの典型は西郷隆盛、五は勝海舟で小人型の至れるもの、九で連想されるのは毛沢東である、と書いておられます。（呻吟語を読む・竹井出版）

・一人一人の心には、善も悪も、強も弱もあり、又は変わりもして上の分類で人の値うちが
決まる物ではないだろうと私は思います。

2 人情の識有り、物理の識有り、事体の識有り、事勢の識有り、事変の識有り、
精細の識有り、^{かつだい}闊大の識有り。此れ皆兼ねぬべからざるなり。而して事変の識は
難しと為す、^{かつだい}闊大の識は貴しと為す。 (人情)

(解説) ～歴史を学び人生を考えるには、次の七つの見識を常に念頭に置きたい。～

一 人情の識 人間は単なる知性の存在ではなくて、非常に微妙複雑な感情を持っている。また意欲というものもある。論理は大腦皮質の機械的な働きに過ぎないが、感情は実に内面的・全体的な働きであり、複雑・微妙・個別的である。それを理解するのが人情の理である。感情の動き(情動)が世界を決めるという新刊書もあり。

二 物理の識 地球温暖化や異常気象・地震など、もろもろの自然現象を支配する法則や体系化は、現代の最新科学でもってしても不明なことが多くある。体の老化や病気の問題にしても同様であろう。それでも今の自分の能力や理性で判断できる物理の理も多くあり、それを考えることは大切である。

三 事体の識 表面に現れたものではなくて本体を掴むこと。全ての物事には現象と内容の両面がある。表面に現れると認識しやすが、それは皮相にすぎず、奥深く隠れている本体はなかなか把握しがたい。これは己の身体はもちろん、社会問題や国内外の情勢にしても同様である。物事の奥に潜む本質に思いを致すようにしたい。

四 事勢の識 さまざまな問題や事件などは、あたかも台風のごとく千変万化する勢いがあり、決して静止したものではない。また、機械的・論理的に一律に動くものでもない。そのような微妙な動きを大観して、思いを及ぼし捉える見識である。

五 事変の識 事勢の識が大観しているのに比して、個々の事実在即したのが事変の識である。事勢は常に事変に満ちており、そのエネルギーがどう変化するのか、これを把握するのが事変の識である。政治や経済、社会事象や自然事象等の各要素について細かく分析して、正確な情報を的確に知ることである。

六 精細の識 事変の識をさらに細かい部分につつこんだ詳細な識である。ただ、精細の識を備えていても、局所にとらわれて事勢の識や事変の識を忘れてしまつては、物事の解決には及ばない。

七 ^{かつだい}闊大の識 小さいことに拘泥せず、大観して論断し決断する、大局的な識である。事変の識や精細の識を元にしながら、部分や枝葉末節にとらわれることなく、確実に全体を把握して決断する全機能的な識である。

～上記の識は何れも大切なものであるが、これらの全てを兼ね備えることは難しい。その中でも最も難しいのは「事変の識」であり、最も貴いのは「^{かつだい}闊大の識」である。～

(余説) こうしてみると容易なことではありません。、できるだけ多くの見識を、特に「事変の識」と「^{かつだい}闊大の識」を備え、全体をコントロールする全機能的な機能を有する人物が、政財界やマスコミ・ジャーナリズムの世界に現れるのが、切望されます。

一方これらの見識は、己の残された人生の「身の処し方・生き方」を考慮する上でも、参考になるような感じもしますが、いかがでしょうか。